

# ＼教職を志す者必見！／ 現役高校教員 LS のおススメ名作映画集！

## 序文

毎年この時期になると、筆者は教育実習のことを思い出す。今年も多くの学生が実習のために母校に帰り、教案の作成、教材研究、授業、学級運営など、教師になるための最も重要な訓練をすることになる。

そんなことを考えながら、教職を志す学生を励ませるような企画をしたいと思いついた。筆者自身は、文学専攻で、阪大の教職課程を修了し、府立高校で教鞭を取った経験もある。本稿では、教員を目指す学生におススメの映画を3作ピックアップした。これらはどれも、筆者自身が見てよかったと思う作品である。おススメ順に順位をつけているので、参考にしてほしい。

教員志望の学生向けと冠してはいるが、それ以外の方にも見てほしいとも思う。これらの作品は、教員、民間企業、公務員、大学院進学、どんな進路を目指す方にとっても、子どもたちと向き合い、自分の考えを深め、社会人としての自己を顧みるよい機会を与えてくれると信じている。

前置きは固くなってしまったが、映画自体は気楽な気持ちで見たい。ただ見ているだけでも涙を誘うシーンもある。コロナウイルス状況下での自宅学習の息抜きになれば幸いである。



////////////////////////////////////

2020年6月

外国学図書館ラーニング・サポーター

言語文化研究科言語社会専攻 (M2)

中村 (執筆)、朴 (デザイン)

////////////////////////////////////

### 3位『パリ 20区、僕たちのクラス』（原題 *ENTRE LES MURS*）

監督：ローラン・カンテ 公開：2008年

変わらないようで変わっていく子どもたち  
～学校に潜む大きな変化の小さなきっかけ～



本作は、様々な人種や出自の子どもたちが集まるパリの中学校を舞台に、国語教師フランソワと生徒たちの関わりがリアルなタッチで描かれている。この映画の特徴は、シーンのほとんどがフランソワと生徒たちの授業のシーンであることだ。その授業は、とにかく騒がしく、決して模範とは言えない。生徒の態度に呆れ、怒りを爆発させる教師が描かれるほどである。思い起こせば、筆者の中学生時代も、授業に集中できず、妨害ばかりする生徒がいたものだ。

大人から見れば、子どもたちは騒がしい素行の悪い子たちに映る。しかし、そう片付けてはならないのが教師だろう。素行が悪くても、子どもたちは純粋で、周囲に敏感で、大人と子どもの境で葛藤している存在だ。自分に素直になれず、大人に対する不信感や欺瞞から、反抗的に振舞ってしまうのも、誰しも通って来た道であろう。また、本作では子どもたちの自宅での様子は描かれないものの、筆者は彼らの学校外での様子を想像してしまう。子どもたちが学校で見せる姿は、彼らの全てを物語っているわけではないからだ。彼らの本心にたどり着こうとすると、作中で描かれない彼らの生活まで考慮することが必要である。あなたなら子どもたちをどう受け止めるだろうか。

授業中、フランソワは国語教師として、正しい言葉遣いを生徒たちに身に付けさせようとする。筆者は英語教員だが、同じ言葉を教える人間として、彼の姿勢に共感する点も多い。授業を通して教えることは、教科の内容だけであってはならないと思うのである。例えば、正しい言葉を使わせるのは、立派な社会人として成長させるためだけではない。言葉の持つ力について考えるのは、本稿の趣旨ではないものの、決して見逃せないポイントである。なぜ、フランソワが言葉にこだわるのか。映画を見て、この点について考えてほしい。

そんなフランソワも完璧ではない。彼自身の言葉遣いが原因で、生徒からの信頼を失う場面があるのだ。多感な時期にいる子どもたちは、たった1語の言葉からでも大きな影響を受ける。この場面では、子どもたちは教師という権威に臆することなく、自分たちは言葉遣いを注意されるのに、なぜ大人の発言は見逃されるのかと、フランソワに必死に問う。子どもたちはいつも必死なのである。本作の見せ場とも言えるこのシーンから、生徒から教員が学ぶことも多いことが分かる。この映画はフランソワの成長を描いてもいるからだ。もちろん、たった1語が子どもたちとの信頼につながるのも事実である。教師と子どもたちの対話と、そこから生まれる信頼関係という観点から本作を見ることは、かなり有効な視点であると思われる。

映画を通して見ていると、子どもたちは大した変化をしていないのようになってしまう。毎日会っている友人の変化ほど気づきにくいように。しかし、学校とは日常の一部であり、小さなことが積み重なる場所である。この小さなことが、いい方向にも、悪い方向にも積み重なり、確実に変化を生む。この作品はどんでん返しがあるようなものではない。ただ、見終わった後に再度冒頭のシーンを見返してみると、確かに何かが大きく変わっていることに気づく。子どもたち、そして教師までも大きく成長させる「小さなこと」が埋め尽くされた本作を、じっくり鑑賞していただきたい。

(本作は外国学図書館で視聴可能。【外国図-1階 AV 資料: F-0468】)

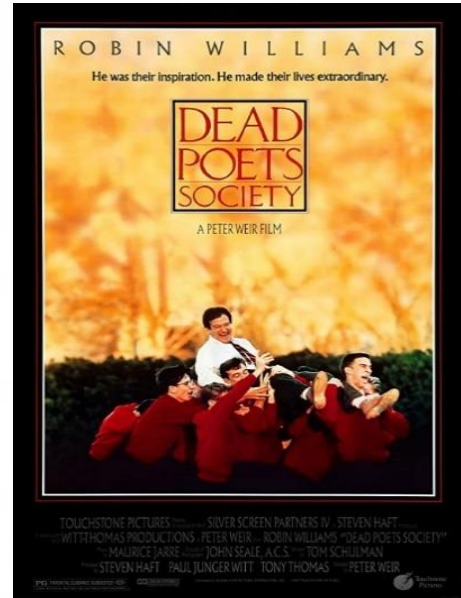
※本稿執筆時点(2020年6月)はAVライブラリー閉鎖中。再開後に視聴できます。

## 2位『いまを生きる』（原題 *DEAD POETS SOCIETY*）

監督：ピーター・ウィアー 公開：1989年

ウェルトン白熱教室

～型破りな教師が伝える人生の授業～



この作品は合衆国最高峰の進学校、ウェルトン・アカデミーを舞台にしている。エリート街道をひた進む少年たちのもとに、ウェルトンのOBでもある国語教師ジョン・キーティングが赴任してくる。厳しい規律に囲まれ、約束された将来に向けて勉学に勤める（勤めさせられる）子どもたちに対して、キーティングは初回の授業で、Robert Herrickの英詩を導入し、それに関連して“Carpe Diem”「いまを生きろ」というメッセージを与える。他の教師とは一風変わったキーティングに惹かれていく子どもたちは、キーティングが生徒時代に主宰していたDead Poets Society「死せる詩人の会」を復活させる。その会を通して、子どもたちは抑圧された自己を開放し、彼らなりの「いま」を生きることがを覚える。

キーティングの授業は、見ている我々までをも魅了する。彼は国語の授業を通して、子どもたちに当たり前を疑わせ、自己表現の自由、無意識的に大きな力に順応する危険性を気概たっぷりに教える。ただ、本作は、子どもたちの尊敬を集め、子どもたちを変えたカリスマ教師のサクセスストーリーではない。終盤に大きな事件が起きるが、それは映画を見てのお楽しみとしよう。

誰もが死すべき運命にある中、一度しかない人生の儚さ、「いまを生きる」というメッセージに、作中の生徒たちだけでなく、大学生の我々も考えさせられる。生徒の1人ニールは、キーティングの授業を受け、役者という自分が本当になりたいものを見つける。しかし、息子を医師にすることに拘泥する彼の父は、彼が勉強以外の活動をするのを強く拒む。ただ「いまを生きる」と言っても、一筋縄ではいかず、自分の力だけで切り抜けられない時もある。それが人生の魅力である反面、それと葛藤する子どもたちの成長、そしてそんな子どもたちを支える大人の役割について思いを馳せずにはいられない。

本作の結末を考えると、キーティングの教員観には賛否両論が出るだろう。教師には子どもたちを変える力がある。しかし、教えたことには常に責任が付きまとう。教えようと意図したことがそのまま子どもたちに伝わるとも限らない。あなたはキーティングのような教師になりたいだろうか？なれるだろうか？これは考える価値のある問いだろう。

筆者の個人的な意見では、キーティングは素晴らしい教師で、一種のロールモデルだと感じている。それは彼が型にはまっていないからではない。子どもたちが生きたいと思う人生を、自分の考えを持って生きさせたい。そんな強い決意が彼の指導に見て取れるからである。また、彼は永遠の少年のように映る。大人になると、子どもの心が薄れてしまう。勤務校で生徒を見ていると、もう筆者には廊下を走り回るような活力すらないことに気付かされる。それと同時に、教壇に土足で登り、教科書を破り捨てさせるキーティングのような視点は常に持ち続けておきたいと思うのである。

あんな型破りな熱血教師に教えられていたら、自分は今頃どうなっていたのだろうかなんて感じてしまう。自らの高校時代へのノスタルジーを感じながら、まだまだ「いまを生きる」べき自分を思い返した時、キーティングの教えにインスピレーションを得ていることに気づく。このコロナ禍で、人生のプランが崩れたと感じる方もいらっしゃるのではないだろうか。Carpe Diem。この言葉は、私たちに優しく、強く寄り添ってくれる気がする。

(本作は外国学図書館で視聴可能。【外国図-1階 AV資料: E-0472】)

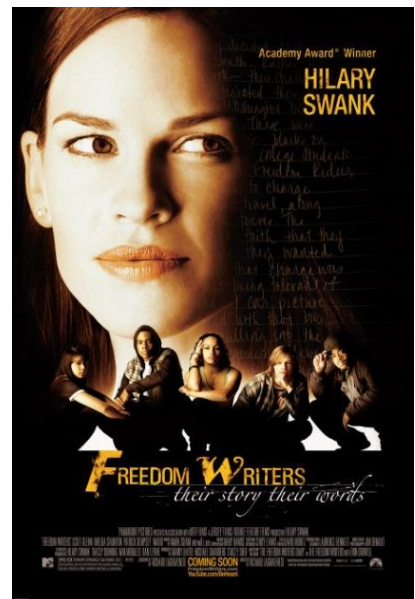
※本稿執筆時点(2020年6月)はAVライブラリー閉鎖中。再開後に視聴できます。

## 1位『フリーダム・ライターズ』（原題 *FREEDOM WRITERS*）

監督：リチャード・ラグラヴェネーズ 公開：2007年

日記は自らが生きた証

～教師よ、教え子の人生のよき読者たれ～



筆者がこの作品と出会ったのは、学部1回生の夏、英語の講義であった。あまりに胸打つ内容に、見終わった後にしばらく口を開けなかったことを未だに覚えている。それ以来今日まで、見てよかったと思う映画トップ3からこの映画が陥落したことは一度もない。

この映画は、人種差別が色濃く残るカリフォルニアのロングビーチにあるウィルソン高校を舞台にしている。主人公は新人教師エリン・グルーウェル。彼女は教師としての勤務初日、意気揚々とめかしこんで登校する。しかし、彼女を待ち受けていた生徒たちは、若いうちからギャングの一員になり、友達が暴動に巻き込まれ死んでいく姿を何度も見てきたような、つらい過去を胸に抱えた子どもたちだった。

そんな彼らを変えたのがエリンである。変えたより、変わりたいと思わせた、の方が正確かもしれない。『アンネの日記』を読ませたり、「寛容の博物館」に連れて行ったりして、ホロコーストについて学ばせるなど、精力的に子どもたちに教えられることは教えようとする姿勢に、子どもたちも刺激を受けていく。また、彼女は課題として、日記を書かせた。日記は生徒本人の許可がない限り、エリンは読まない。もし、読んでほしければ、教室のロッカーに提出するというルール。ある日エリンがロッカーを開けると、大量のノートがそこにあった。エリンは、子どもたちが授業中には決して口

にすることがない、自らの苦境を赤裸々に綴った文章に出会う。この日記を通して、エリンと子どもたちはより強い絆を結び、エリンのクラスは子どもたちの居場所になっていく。

筆者が今作で一番重要だと思うのは、エリンが子どもたちに日記を書かせたことだ。子どもたちは、多感な時期を人種問題のど真ん中に生きている。そんな彼らの中に語りた言葉がたくさんあることは想像に容易い。それをアウトプットさせてあげ、それを受け止めてあげる。この姿勢こそが、教員、そして大人として本当に重要なことなのだと感じさせられるのだ。また、実際に言語化するという行為の持つ力は大きい。子どもたちは必死に文字を綴る。そして、それをエリンに読んでほしいとロッカーに入れる。子どもたちも自分の人生という物語の読者を常に欲しているのだ。また、書くということは、彼らが生きた証を残すことになり、彼らの自信や達成感にもつながっていく。子どもたちは自己表現を通して、自分自身も誰かを動かす1人になれることにも気づくのである。

エリンは並外れた行動力で、世界は自分の手で変えられることを自らの背中を示していた。『今を生きる』のキーティング同様、彼女も風変わりで、型にはまっていない。それを疎ましく感じ、あの子たちに何を教えても無駄だとはじめから諦めている教科主任のマーガレットたちをよそに、エリンは子どもたちのためなら何でも実行する。子どもたちのポテンシャルを信じ、それを伸ばすために自らが奔走する。その姿勢に心を動かされるのは、教室の生徒たちだけではないだろう。

冒頭でも述べたように、筆者は本作が大好きである。エリンを通して、教師として、大人として子どもたちに背中を見せるべきだと考えさせられると同時に、作中の子どもたちの必死に生きる表情が愛しくて仕方がない。そんな作品について、このように書き記したのも、匿名の読者にこの作品の魅力を伝えたいからである。今やSNSで誰もが情報を発信できる世の中である。とはいえ、理想の読者がいるとは限らないのが現実だ。生徒たちにとって教師は発信者である。ただし、それだけにとどまらず、彼らの人生のよき読者たれと、この作品は教えてくれる。



## まとめ

学部生時代、教職課程の授業で、ある先生がおっしゃったメッセージを未だに覚えている。「教師は夢を持っていなければならない。そして、夢を生徒に語る。そうすることが、子どもたちに夢を与えることにつながる。」実際にこうだったかまでは覚えていないが、大筋はこうだ。個人的には、自分の今の夢は何かと問われれば、答えに窮するのが正直なところだ。ただ、エリンにしても、キーティングにしても、フランソワにしても、子どもたちがよりよい未来を歩けるようにしたいという強い夢を持っているように思われる。それが、子どもたちを感動させ、子どもたちが自らの夢を持つことにつながっているのは確かだろう。

本稿では、教員を目指す学生向けにおススメの映画3作を紹介した。まとめに代えて、ここで述べておきたいことは、この記事の筆者自身もまだ大学院生であり、新米教師であることだ。この記事、20年後30年後に読み返した時、まだまだお前は理想主義的で考えが甘かったなと自分を叱るのかもしれない。ベテランの先生が御覧になれば、それこそ若気の至りと感じられるかもしれない。それでも、これらの映画を一生覚えているのではないかと感じる節がある。エリンやキーティングのような、自由奔放な授業を実際に出来るほど、現場は甘くないのが現実だろう。ただ、筆者は彼らに憧れを感じる。そして、彼らを見て学んだことが、実際に子どもたちと関わっている時に活かしていると感じさえする。すでに、筆者の教員観の中に、彼らは息づいているのだ。

### 画像引用元

<https://www.theguardian.com/film/2009/feb/27/the-class-entre-les-murs>

<https://www.imdb.com/title/tt0097165/>

<https://www.imdb.com/title/tt0463998/>